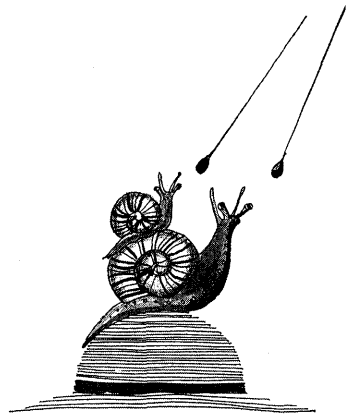


「時」の共有

豊田 一秀

かれこれ十年程前のことになるが、当時二歳位であった息子を自転車の前に乗せて、よく家の近くを散歩した（正確には散車）。初夏の休日の午後、どこに行くでもないままに、走り慣れた街にペダルをこぎ出すのは二人にとっては楽しいことだった。息子はハンドルにかけた幼児用の椅子にチョコンと座ってご満悦であった。目がきょろきょろと動いているのが後ろからもはっきりと感じられる。私はハンドルをもつ自分の両腕の中に息子を座らせながら、五月の風に産毛がそよぐ様子を楽しんだ。二人して同じ方向を見ているひと時であった。我々のお

気に入りのコースのひとつに山手線を見下ろせる線路ぎわの路があった。視界の外れには巣鴨駅も見え、右左から来る電車や、駅に出入りする電車が止めた。私は片足を低い石垣にかけて自転車を止めると、そのまま二人で線路を見下ろした。右から電車が来、左から電車が来る。電車の中には電車ごとに様々な人……。私たちは多くを話さず、息子が何を見ているかさえ私の位置からは分からない。行き交う電車を何本見たことだろう、ゆっくりとした時が流れた後、私はおもむろにペダルをこぎ始める。息子は何も言わない。もっと見ていたいとぐ



ずるわけでもない。私もあと一回だけ電車を見たら帰ろうと息子に提案するわけでもない。日常ささいなこと、あれだけ自己を主張し始めている息子が何も言わない。

私が満足し、もう帰ろうと思ったその時に、息子も同じように満足した。確かめる術もないが、共に居ながら会話を交わす必要もないこの空気の中で、私はその時そう確信した。

もう十年以上も前のことであるが、子どもと「時」を共有できたとき強く心に残ったひと時であった。

こんなことを思い出していたら、仁科弥生氏の優れた論文である「エリクソンと幼児教育」(注1)の一節を思い起こした。授乳を通して、与える母親も、また受ける乳児も互いにくつろぎ合い、その時を楽しみ合うことが、子どもが(この場合は乳児)信頼関係を得る過程において大切であるということであった。双方が楽しい時を共有することの意味と

価値はすでにこの頃から始まっているのである。

さて、幼児教育の場においても、このところ教育要領の改訂を含めて、子どもの生活に保育が近付こうとしてきていることは喜ばしいことである。一人ひとりの子どもがゆっくりと自分の時間を使い、自分の世界を広げていく事をよしとするような保育。一方で、子どもの傍らにあって子どもを支えつつ、子どもと共に楽しむことが保育者に許され、また望まれるような保育。このような保育を考えたとき、子どもとの「時」の共有が一つのキーワードになるのではないだろうか。子どもと時を共有でき、初めて「子どもと共に在る」ということの意味が浮かび上がってくる。保育とは、ただ面白おかしく子どもと過ごすことではない。しかし、一方で子どもを一つの鑄型にはめ込んだり、子どもの欠点探しをしたりすることも勿論ない。幼児教育のゴールはもう少し遠くにあったのだ。

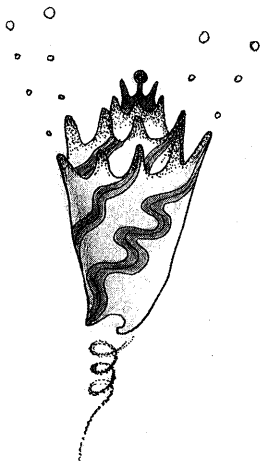
一人ひとりの子どもの心の流れに添った「子どもの時間」といったものに尺度を合わせて幼児教育の現場を眺めてみると、登降園時間に始まって、保育日数、年齢ごとのクラス分け、入園時期、卒園時期と「大人の時間」が大きな顔をしている現実気付く。これらの「時間」について、もう一度見直してみる時がそろそろきているように思う。それと同時に、私達自身も心の中に細々と生きているはずの

「子どもの時間」を呼び戻すことが、他者と時を共有しようとする時に、相手が大人であれ子どもであれ、どうしても必要であるような気がしてならない。
(お茶の水女子大学附属幼稚園)

注1 仁科弥生著「エリクソンと幼児教育」一九八一年六月号より一九八三年十月号まで「幼児の教育」に掲載

クリステヴァ、 『女の時間』を読む

浅井美智子



クリステヴァの『女の時間』（棚沢直子・天野千穂子編訳）は、一九七四年から八四年までの「女の

時間」を含む十のインタビューと論稿から編まれている。勿論、クリステヴァのすべての論稿を収録し